魔法戦記リリカルなのはForce-ex-

龍騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ－ｅｘ－

【Ｎコード】
Ｎ５４２９Ｚ

【作者名】
龍騎

【あらすじ】
プロローグなので特になし

プロローグ（前書き）

初めまして、龍騎です。
初めて小説を書くので至らない点が数多くあると思います。
完全ド素人が書いた『魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ』の二次創作。
楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

プロローグ

第９７管理外世界「地球」

何も変わらない日常
何も変わらない風景
何も変わらない・・・。
そんな日々が、当たり前のように続く。
俺の名前は雨宮龍星（あめみやりゅうせい）。聖王学院高等科に通う普通の男子高校生。
今日も何も変わらずいつも通りに学園生活を送って、放課後・・・。

「リュウ～。今日はバイトだっけ？」

こいつはクラスメイトで幼馴染の神楽坂澪（かぐらざかみお）。

「そうだよ。だから部活はパスな」

そう言いながら帰宅準備をしながら、何も変わらずその場を後にした。
後に俺のすべてが変わることを知らずに・・・。

ミッドチルダ―時空管理局本局―

「第９７管理外世界『地球』にて大規模な魔力反応を確認！」

管理局ではかつて無いほどの強大な魔力反応に騒然としていた。
その数は不明で広範囲に反応があるため管理局員を半分以上向かわせることになった。
その中の部隊『特務六課』

「再び地球で起こるなんて・・・。」

かつて、地球で起こった事件『P．T事件』そして『闇の書事件』に関わった高町なのは。

「なのは、必ず食い止めよう。被害者が多くならないうちに！」

なのはと同様『P．T事件』そして『闇の書事件』に関わったフェイト・T・ハラオウン。

「ほな、行くで！ヴォルフラム、地球に向けて発進！！」

『闇の書事件』にて重要人物となり、その後数々の事件を仲間とともに解決してきた頼れる指令、八神はやて。

再び地球から始まる魔法の物語。魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ－ｅｘ－、始まります。

プロローグ（後書き）

プロローグにしては少し短いかな？って気がします。
次回からは本編にて、主役がえらいことに巻き込まれます。
どこぞの魔砲少女みたくえらいことになります。
では今回はこのくらいにして・・・。
感想、ダメだし等どしどし書いてください。

始まり（前書き）

プロローグに続いて二回目の投稿となります。
プロローグを投稿した後にすぐ本編を書き始めました。
本編突入ということで、いきなり急展開です。
それでは、魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ－ｅｘ－始まります。

始まり

日本某所―
普段は夜でも賑やかな街なのに、この日はやけに静かだった。
空は不気味な色をしており、周りも夜というには少し明るい。そしてなにより―

「おかしい。人が1人もいない・・・。」

そう、いくら夜と言っても、今の時刻は午後7時。街通りに人がいなくても、店の中には人がいてもおかしくはない。
そんな中を歩いていた男子―雨宮龍星。
現在高校3年生。今はバイトから帰る途中だった。
しばらく歩いていると、少し広い公園にたどり着いた。
少し休憩しようと龍星が公園に脚を踏み入れた瞬間―

今すぐそこから逃げろ!!

突然頭の中に誰かの声が響いた。
龍星は後ろを向いたが、誰もいない。そして―

“ドオオォォォォォォォォォン!!!!!!!!!!!!”

大きな爆発音がした。しかも近い。
音はしたが、何故か煙の立ち込める様子がない。それどころか、人が空から降ってきた。

「大丈夫ですか!?」

龍星が無事を確認しに近づいた。
性別は男。手には日本刀が握られていた。
「早く・・・逃げろ。ここは・・・危険だ」
男は龍星を自分から遠ざけ、日本刀を構えた。
「あんた怪我してんだろ。それにここは日本だ。日本刀なんか持ち歩いたら普通警察に捕まるぞ！！」
男は龍星の話を無視して、周りに神経を研ぎ澄ませた。
「早くここから立ち去るんだ。巻き込まれたくな・・・来たか。」
男を龍星の前に1人、空からゆっくりと降りてきた。
地上に着地すつと、どこにしまっていたのか日本刀を手に取った。
「なんなんだお前ら。おわっ！！」
龍星が呆然と立ち尽くしていると男は龍星を突き飛ばし、空から降りてきた人に斬りかかった。
しかし、男は体力を消耗していたため攻撃を避けられ龍星の前まで蹴り飛ばされた。
「くそっ・・・。」
男は立ち上がろうとしたが、直ぐに膝をついた。すると—
「なんかわかんねぇけど、とにかくあいつを倒せばいいんだな！？」

龍星は男の持っていた日本刀奪い構えた。
ゆっくりと間合いを詰めてくる目の前の人は龍星が身構えた途端、一気に近づいた。
「悪く思うな・・・。」
目の前の人は一言いうと、持っていた日本刀で龍星を斬りつけた。
しかし、その攻撃と同時に龍星の後ろにいた男が龍星とともに横一直線に跳んだ。
「お前じゃあいつには勝てない・・・無論今の俺にも。だから！」
男は自分の首にかけていたネックレス―先端には宝石の付いた十字架―をちぎり、龍星の胸に押し付けこう叫んだ。
Ｓｅｔ　ｕｐ、ユニゾン・イン！！
すると、男と龍星は一瞬光に包まれ、光が消えた時には龍星の姿は変わっていた。あの男もいない。
「なんだこれ！？俺いつの間にこんな姿に！？」
自分を見てみると、先程と服が違い全身黒の服でとても体が軽かった。
『余所見をしていると、あいつにやられるぞ』
突然頭の中にあの男の声が響いた。
当然周りを見てもどこにもいない。

『いまおれはお前の中にいる。』

「えええぇ！？」

『頼む。あいつを倒すために協力してくれ。』

龍星の中にいる男は悔やみながら同意を求めた。

「わかった。ただし、条件がある。お前の知ってること全部俺に教えろ。」

男は断る理由がなく、素直に承諾した。

「よし。まずはあいつを片付ける！！」

龍星は、今まで目がくらんでいた人を睨んだ。

『あいつは一筋縄じゃいかない。距離をとって様子を・・・っておい！』

話も聞かずに突っ込んだよ・・・こいつは。

龍星が斬りかかると同時に目の前の人も斬りかかった。

その真ん中で2人はぶつかったが、若干龍星がおしている。

「やっぱり少し押しただけで完全には倒せないか。」

龍星はそのまま押し切ろうとしたが、目の前の人は攻撃をやめ後ろに下がった。

「時間か・・・・。」

目の前の人は転移魔法を使って、その場を後にした。それと同時に周りの風景も元に戻った。

龍星の体は再び光に包まれ、元の姿に戻った。男の龍星の隣に現れた。

「まったく。お前ってやつは。」

男がその場に座った。

「俺の名前は雨宮龍星」

龍星は男に手を差し伸べると当時に、自己紹介をした。

「・・・ゼロだ。」

男・・・ゼロは龍星の手を取りながら答えた。

しばらく休憩をしていると、空から1人降りてきた。

龍星は身構えたが、ゼロがとめた。

「管理局の方ですね？」

ゼロが質問をすると、武装を解除してゆっくりとこちらに姿が見えるように近づいてきた。

「そうです。私は時空管理局本部武装隊、高町なのはです」

姿が見えるようになると、龍星は言葉が出ず目の前の女の子に見とれた。

「詳しい話を伺いたいので、任意同行願いますか？」

なのはは警戒しつつ優しく龍星とゼロに話しかけた。

「わかりました。そちらに従います。」

こうして、２人はなのはの後について行った。

始まり（後書き）

すごい中途半端な終わり方してすみません。
普段はノートに下書きをしながら書いているのですが、こうでもしないとどこで終わっていいのかわからなくなりました。
投稿ペースについては週1で行けたらいいなと思っています。
それでは、また次回。
感想、ダメだし等どしどしコメントしてください。

準備（前書き）

今回は戦闘シーンはありません。

龍星の家族が出てきます。

それでは魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ－ｅｘ－始まります

準備

ミッドチルダ―時空管理局地上本部―

「とりあえず、詳しい話を聞きたいな。」

ここは局内にある取調室。

龍星とゼロはあの後高町なのはに連れられてミッドチルダにやってきた。

ゼロはミッドチルダに来るのは初めてではない。龍星はもちろん初めて。

「俺が説明します。」

ゼロが小さく挙手をした。

「俺たちが戦っていたのは『ダークネスソウル』に取りつかれた元人間です。」

「「元人間？」」

なのはと龍星は声を揃えて言った。

「元々は普通の人間です。しかし、特定の条件が揃うと右手の甲もしくは左手の甲に謎の紋章が浮かび上がるんです。」

ゼロはポケットから一枚の写真を見せた。

そこに載っていたのは右手の甲、その甲には紋章らしき刺青がされていた。

「特定の条件って？」

龍星が質問をした。しかし、ゼロは首を横にふってわからないと言った。

「そうですか。なら、今度はあなた達について聞いてもいいかな。」

「俺の名前はゼロ。」

「俺は雨宮龍星です。」

２人はなのはに自己紹介をした。それだけ。

「君たちが使っていたこれ。これってデバイスだよね？」

なのはは、机の上に置いてある袋の中に入っている十字架を指差した。

それは3人がミッドチルダに着いたとき、なのはが念のためと言って2人の持ち物を預かっていたものだ。

「確かにあなたの言うとおり、それはデバイスです。名前はありません。」

「このデバイス、預かった時に少し中を調べさせてもらったんだけど・・・全部の情報にリミッターが掛かってて見ることができないの？何か知らない？」

「そのデバイスには、魔王に関する情報がすべて入っています。それを見るには・・・龍星。」

ゼロは龍星を見た。

「君に魔王の意志を継いでもらうしかない。」

なのはは驚いた様子。龍星は全くわけが分からない。

「待って。王は聖王、冥王、覇王だけのはずだよ？」

なのはの言うように、王は3人だけのはず。

「魔王はあなたの知っているベルカ時代に生きた人ではありません。」

ゼロは意味深に話し始めた。

もともと魔王、ルシファーはベルカ時代に生きた人ではない。

ベルカ時代の世界とは別の世界『魔界』に君臨していた人で、その世界にももちろん人が存在していた。

しかし、あることがきっかけで魔王はすべてをこのデバイスに託すことになった。

神話戦争―

神々の最終戦争ラグナロクに魔界が巻き込まれてしまった。

元々魔界と神の都ヴァルハラは交友関係にあった。

その関係を壊したのはロキ。主神オーディンの息子だったやつだ。

オーディンとルシファーはロキを止めようと、連合として動いたが結果は惨敗。

ロキの前にはなす術がなかった。

２つの勢力は日に日に減っていって終結を迎える寸前まで来た。

そこにロキの奴はとんでもない召喚獣を出してきやがった。

“ディアボロス”と“リヴァイアサン”。
破滅を呼ぶ2体をそれぞれヴァルハラと魔界に送り込んで2つの世界を滅ぼそうとした。
それを止めたのがルシファーだった。
どんな方法で止めたのかはわからないけど、ディアボロスとリヴァイアサンを同時に消滅させた。

「ちょっと待て。その話からするとディアボロスとリヴァイアサンは別々の世界にいたんだろ？どうやって2体同時に倒したんだよ。」

わからない。とゼロは答えた。

「ただわかっているのは、ルシファーは2体と同時に消えたってことくらいだ。デバイスにすべてを託して。」

「その記憶を見るには俺が魔王になるしかないのか。」

正直ゼロは乗り気ではなかった。
自分のせいで全く関係のない龍星を巻き込んでしまった。これからの龍星に何が起こるかわからない。

「わかった。俺、魔王になるよ。」

龍星は真顔でそういった。

「しかし、元々君は関係がないんだ。強制するつもりはない。だから・・・」

ゼロの表情がだんだん暗くなっていく。

「・・・正直言って怖いよ。でも関わってしまった以上最後までやりきる。もし、過去と同じことをしようとしてるやつがいるなら、俺はそいつを倒す。」

龍星は揺るぎない意思表示をした。

巻き込まれた以上は仕方ない。自分がから進んで協力していることだし、その責任は最後まできちんととる。

それが龍星の考えだった。

「なら私たちに協力してもらえないかな？」

なのは思い切ったことを提案してきた。

「もちろんです。自分にできることがあればやります。」

龍星は快く受け入れた。ゼロは龍星がそれでいいなら協力すると言った。

「龍星、後悔だけはするなよ。たとえどんなことが待ち受けていようとも・・・。」

このあと2人は再び地球に戻り、龍星の家に向かった。

「ただいま。」　「おじゃまします。」

「おかえり～。あ、お友達も連れてきたんだ。」

出迎えてくれたのは龍星の妹のヒカリ。中学1年生。

「今食事の準備終わるから少し待ってて。」

「あぁ。ヒカリ、後で話があるから食事が終わったら少し時間くれ。」

「わかった～。」

そう言いながら食事の準備を素早く終わらせる。

「できたよ～。早く食べよ～」

リビングのテーブルには日本人らしい食事が用意されていた。しかも3人分・・・3人分？

「俺のまで用意してくれたのか。」

ゼロが龍星の横についた。

「うん！一緒に食べよ～。」

龍星、ゼロの前にヒカリが座りみんなで手を合わせて・・・、

「「「いただきます」」」

合唱をした途端、ゼロがうろたえた。

「何から食べていいかわからない・・・。」

「何でも食べて。いっぱいあるから遠慮せずに。」

ヒカリが笑顔で答えた。

「わかった。」

目の前にあるサバの塩焼きから食べた。

「どう？お味は？」

「おいしい。」

「よかった～。」

そのままゼロはサバを食べ続けた。

「他のも食べてね。」

ゼロは言われるがままに色んなものを食べた。

――――３０分後――――。

「「御馳走様でした。」」

「お粗末さまでした。」

みんなで食器の後片付けをしてリビングにあるソファに座った。

「それで、話ってなに？」

ヒカリが先程の話について聞いてきた。

「来月・・・と言ってももうすぐだけど、俺しばらく家を空けるよ。」

「えぇ～！なんで～！？」

ヒカリは立つほど驚いた。

「事情を説明するから座って。」

ゼロがヒカリに座るよう促した。

ゼロはヒカリにすべての事情を説明した。

「・・・つまり、お兄ちゃんはその『魔王』になるためにミッドチルダってところに行って向こうの人と悪い奴らをやっつけるってこと？」

「簡単に説明するとそうなる。」

「許すわけないじゃん！！なんでそんな危険なことうちの兄がしなきゃならないのよ！！」

ヒカリが言うこととはもっともだった。

「もちろん、俺は強制するつもりはないと本人に言った。」

「でも手を出した以上はやるしかない。」

「何でよ！？命に関わることなんだよ！？・・・お願いだから私を

1人にしないで。」

ヒカリは涙ぐんでしまった。

「1人にしないで？そういえば龍星。親は？」

「死んだよ。俺が高校に上がってすぐ、何者かに襲われて。」

そういって龍星はテレビの横に置かれている写真立てに目をやった。

「そうか。すまない。」

「私はぜっっっったいに嫌だから。」

そういってヒカリはリビングを出た。

「・・・龍星やっぱり。」

「いや。行くよ俺は。」

龍星は折れなかった。もしかすると、両親を殺したやつを見つけられるかもしれないから。

ゼロは黙り込んでしまった。

「今日はもう寝るか。」

「そうだな。俺はどこで寝ればいいんだ？」

「俺の部屋で寝ればいいよ。布団用意するから。」

「わかった。」

龍星の部屋に行くと既に布団が用意されていた。龍星の上にはメモが用意されていた。

『さっきは許さないとか言ったけど、許してほしかったら条件があります。私も連れて行きなさい！！』

メモにはこう書かれており、龍星は開いた口が塞がらなかった。

「あいつは・・・。まだ中学生に上がったばかりなのに。」

「兄思いのいいやつじゃないか。大切にしろよ。」

「そうだな。寝るか。おやすみ。」

「おやすみ。」

２人はそれぞれの寝床に着いた

準備（後書き）

新キャラが出てきましたね。雨宮ヒカリ。

兄思いの優しい妹。

・・・そんな妹が欲しいと思ったことが自分には何度もありました。

ｏｒｚ

次回はいよいよミッドチルダで事件が起きます。起こる予定です。

次の投稿は少し遅れるかと思います。それではノシ

感想、ダメだし等どしどしコメってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5429z/

魔法戦記リリカルなのはForce-ex-

2011年12月25日20時50分発行